

ESSAY
エッセイ

クラシックは面白い — その 12

ピアノのお話 V

ピアノが誕生したとき、その最初の発明者はクリストフォーリで、彼の新しい楽器は“ピアノもフォルテも出せるチェンバロ” arpicembalo che fa il piano e il forte という長い名前で紹介されました。つまり、“これはチェンバロなんだが、従来のチェンバロとちがう所はピアノもフォルテも出せることだ”と言っているんです。でも先回説明したようにピアノとチェンバロでは、音を出す仕掛けが全くちがいます。チェンバロは爪で弦をはじいて音を出します。ですから発音のメカニズムからいえば、チェンバロはギターやハープと同じ楽器です。しかし、ピアノはハンマー・ヘッドという木とフェルトの塊で弦を打つ(叩く)楽器なんです。だから打楽器の一種と言えば言えますね。似ている楽器は木琴(シロホン)や鉄琴ですね。みんな叩いて音を出します。でもピアノは打楽器とは呼ばれていません。鍵盤楽器と呼ばれます。鍵盤 keyboard がついているからでしょう。でもパイプ・オルガンも鍵盤がついていますが、あの楽器は叩いて音を出すのではなく、風を吹き入れて音を出す——その意味では吹奏楽器(管楽器)の仲間です。

するとピアノはだれの子なんでしょうか。ふつうにはチェンバロが親だと思われていますが、親とは全く似てなくて、その意味では木琴の子であるかもしれない。「オタマジャクシはカエルの子。ナマズの孫ではないわいな。それが何より証拠には、やがて手も出る足も出る。」でもオタマジャクシはカエルよりはナマズに似ています。

人間はサルから進化したと聞いていましたが、学問的には人間とサルの祖先は別なんだそうです。で、チェンバロとピアノも全く別の楽器なんです——形は似ていますが。

ピアノのメカニズムの専売特許は、ハンマー・ヘッドというものが鍵の先のほうに着いていて、鍵を押さえると、向こうのほうで、そのヘッドなるものが飛び上がって鍵を打つ——打ったら素早く元の位置に戻る——ここが大切なんです。ヘッドが弦を打ったは良いが戻ってこなかったら、一回限りでアウトです。この回収装置が難しい。いまピアノの一つの鍵にはたくさんの部品が使われていますが、一口で言ってしまうとそれは“打弦”と“回収”の装置なんです。発明はしたけれど、なかなかその装置がうまく安定して働くようにならなかったのだから“ピアノ”は改良の積み重ねが必要で時間がかかりました。それが実用化し普及を始めるのは 1770 年代のことでした。モーツァルトは一口に“ピアノの神童”だったと言われますが、彼の生まれは 1756 年で、栄光の神童時代に弾いて見せたのはピアノではなくチェンバロでした。(つづく)

執筆/石井宏(音楽評論家)

1930 年、東京生まれ。音楽評論家・作家・翻訳家。モーツァルト評論の第一人者と目され、評論活動のほか、ラジオやテレビの番組でも評判となる。2004 年、『反音楽史 さらば、ベートーヴェン』(新潮社)で山本七平賞を受賞。

美味しく！楽しく！聴きごたえたっぷりのピアノ・フェスティバルがまた岐阜へやって来る！

ジャコバン国際ピアノ音楽祭 2018 in 岐阜

チケット
発売中

2018. 6/9 土

オープニング・
コンサート

全席指定 500円

16:00開演[15:15開場]

出演/細川千尋トリオ



© 井村重人

2018. 6/10 日

マチネ・
コンサート I & II

全席指定 1,500円

14:00開演[13:30ホール開場]

出演/小川加恵、レミ・パノシアン



トーク・イベント

自由席 500円

18:00開演[17:45開場] ※リハーサル室

スペシャル・ピアノ講座「調律師が見た巨匠たち」

講師/瀬川 宏 聞き手/浦久俊彦



© Masaaki Hiraga

ソワレ・コンサート

全席指定 1,500円

18:30開演[18:00ホール開場]

出演/福間洸太郎

